

皆さんへおいしい牛肉をお届け

飼育方法を工夫し、日本一の獲得を目指す



有限会社千葉仁畜産 代表取締役社長

Chiba Masanori

千葉 正憲さん 登米町・岡谷地（写真左）

日本一の牛を目指しています。仙台牛枝肉共助会で何度かチャンピオン賞を獲得しています。

私が家業の肥育（※1）を継いだのは、22歳ぐらいのときです。当時は、約20頭しかいませんでしたが、現在は約450頭います。子牛は市内産が約90%を占めます。市内の牛は状態や体格も良いですからね。市内産の子牛も私の牧場の環境に合っていると思います。品質の良い牛に育っていますからね。畜産業を始めたときは、肥育の技術をどこで学べばよいのか分かりませんでした。最初は餌が重要と思っていたので、いろいろ試しましたが、うまく育ちませんでした。勉強していく過程で、牛舎の環境管理が大切ということを知りました。昔から、牛舎に金を掛けるなどと言われていましたが、牛にストレスを与えないようにすることも、高品質の牛をつくることにつながります。

一般的に雄と雌の飼育方法は異なるといわれ、別々に飼育されます。しかし、うちは、雄と雌を同じゲージで飼育しています。雄だけ、雌だけだとけんかしますが、一緒にすると、そういうこともありません。人と同じで、リラックスするみたいですね。

消費者の皆さんへ、さらにおいしい牛肉を提供することは、日本一というゴールに続く道だと思っておりますので、今後もおいしい牛肉をお届けしていきます。

※1 子牛に飼料を与えて、20か月程度育てること

県内産の種雄牛にこだわり飼育

登米市生まれ、登米市育ちの牛を育成したい



有限会社^{エヌ オー エー}N・O・A

中田町・森六荒谷（写真左が代表の高橋良さん）

和牛繁殖を30年ぐらい前から始め、個人で50頭ほど飼育していました。しかし、畜産部門の規模拡大を見据え、08年に農業法人に畜産部門を設け、これまで経営しています。現在は、繁殖母牛を約120頭飼育し、種雄牛の8割は宮城県産を使用しています。県産の中でも、登米市米山町産の好平茂が大半を占めています。地元にいるからには、地元のものを使いたいですからね。そしてなにより「登米市生まれ、登米市育ち」の牛を育成したいと考えています。

稲わらは、会社の稲作部門で取り組んでいる農業・化学肥料節減栽培米のものを与えています。人に優しいコメは、牛には優しいわらになります。最終的に、その牛をまた人が食べるのですから、最初の入り口が肝心だと思います。登米地域は、環境保全米のわらを肉用牛に使用しているの、より安心して安全だというセールスポイントになると考えています。和牛日本一を決める「全国和牛能力共進会」は、5年に一度開かれる畜産界最大のイベント。その全共が17年に宮城県で開催されます。現在、役員として、その準備に追われています。前回大会は、九州勢が上位を独占。その後九州の牛は、高値で取引されています。全共の結果は、その後の市場にも良い結果をもたらします。日本一になれば、登米産牛だけではなく、市全体のPRと経済効果も非常に大きなものになります。畜産農家は、これからの2年間が正念場だと考えています。

県の基幹種雄牛「花茂桜」を育成

優秀な種牛を育てることが登米産牛のPR



Sato Muneco

佐藤 宗男さん 石越町・第十

先月、わが家で生産された「花茂桜」が県の基幹種雄牛（※1）に認定されました。うれしかったですね。長年の努力が実りました。花茂桜の父は、青森県を代表する「第一花国」。肉付きや霜降り度合がとても良い牛で、母は福島県の「とみふく（写真）」です。

花茂桜は、肉付きが良く、総合育種価（※2）は、県の種雄牛のスーパースター「好平茂」に次いで値が高い牛です。現在、県で飼育しています。繁殖（※3）をしている農家の皆さんから利用され、いずれは県を代表する種雄牛になってほしいですね。

和牛の繁殖を始めたのは35年ぐらい前です。当時は、新しい産業で取り組む人がたくさんいました。繁殖は、優秀な雄と雌を人工授精により交配させ、さらに良い牛の生産を目指すものです。今後も牛の改良を続けていきます。

繁殖農家が優秀な種牛を生産することで、県内の肉用牛の品質が上がり「登米の肉はうまい」という評判につながると思うので、これからも頑張ります。

※1 宮城県肉用牛改良委員会で認定された種雄牛。認定されると県が牛を買い取りその精液を農家に販売する

※2 評価された親から生まれる子牛にどのような性質が受け継がれるかの目安

※3 雌牛に人工授精させ、子牛を出産させること



牛の匠たち

高品質な登米産牛を数多く生産する畜産農家
一大生産地を支える
「牛の匠たち」にその取り組みについて聞きました

